

## 八郎太郎の伝説／今も生きるアニミズムの心

谷口吉光（秋田県立大学）

秋田県を代表する十和田湖、田沢湖、八郎潟という3つの湖は、伝説によればいずれも地元の神様が作ったとされている。十和田湖と八郎潟を作ったのは「八郎太郎」という男の神で、田沢湖を作ったのは「辰子」という女の神だという。

しかも八郎太郎と辰子は相思相愛の仲で、毎年太郎は秋の終わりに田沢湖にやってきて、冬の間辰子と過ごすのだという。秋田の人々はなんと心優しい恋物語を語り伝えてきたことか！

昨年、縁あって八郎太郎と辰子の伝説について調査をする機会があった。私が八郎太郎に興味を持ったのは、最近八郎湖周辺で盛んになってきた環境再生活動のシンボルとして「八郎太郎」の伝説がよく使われているからだ（たとえば八郎湖の湖岸に昔の植物を復元しようという活動は「八郎太郎プロジェクト」と呼ばれている）。

「八郎湖をきれいにしたい」という環境意識と「八郎太郎を大切に思う」というアニミズム（自然信仰）的な信仰心が深く結びついているのではないかと考えたのだ。

民俗学者・柳田国男が1910（明治43）年に書いた「遠野物語」には、ザシキワラシ、天狗、山男、河童などの話がたくさん出てくる。こうした自然のなかの神を信じる信仰をアニミズムという。100年前の東北の人々はみんなアニミズムを信じていたのだが、近代的な思想が広まるにつれて、アニミズムは「非科学的」「迷信」と切り捨てられてしまった。

調べてみたところ、八郎太郎にはさまざまな顔があることがわかった。十和田湖を作った太郎（そして後に修験者・南祖坊と戦った太郎）は恐るべき力を発揮する「荒ぶる神」だ。八郎太郎伝説のこの部分を十和田湖の噴火と関連づける説があるのも納得できる。

しかし、八郎潟に移り住んでからの太郎は、漁師に豊漁と安全をもたらす漁業の神として敬愛される存在に変わった。今回の調査によって、八郎潟周辺には八郎太郎を祀った神社や祠が37カ所あることが確認された。

そして、田沢湖の辰子のもとに毎年通う不思議な旅人としての太郎がいる。太郎は龍神であるが、辰子に会いに行く時は八郎潟の岸辺で人間の姿に戻り、足を洗って身なりを整えてから、徒歩で田沢湖に行ったようだ。太郎が足を洗ったという井戸が今でも大事に保存されているし、太郎が途中泊まったとされる宿が今でも現存している。

何より印象的だったのは、太郎について語る人々の何ともいえない親しげな、懐かしげな、リアルな口調である。それを聞いていると、私も自然に「やっぱり八郎太郎は存在するんだ」と思えてくるから不思議だ。

秋田にはアニミズムの心がまだ色濃く生きている。

（朝日新聞「あきた時評」 2007年4月2日掲載分を加筆・修正）